

# 甘樫丘東麓遺跡の調査

## —第157・161次

### 1 第157次調査

**甘樫丘東麓遺跡の調査** 甘樫丘は、飛鳥川の西岸にある標高145mほどの丘陵で、周囲には多数の谷が刻まれ複雑な地形をなしている。

『日本書紀』には、皇極天皇3年(644)この丘に蘇我蝦夷・入鹿親子が邸宅を建てたことが記されており、7世紀における甘樫丘の利用実態の解明は、古代史研究の上でも重要な課題のひとつである。

遺跡は、丘の東南麓にある谷のひとつに位置し、1994年の調査(第75-2次)で、7世紀中頃の焼土・焼けた壁土・炭化した木材・多数の土器などを含む土層が確認された。その後、公園整備を契機として、2005年度に試掘調査をおこない(第141次)、以後継続的な調査を実施している。2006年度には7世紀前半の石垣を約15mにわたって検出し、この谷が7世紀の前半から末にかけて大規模な造成を繰り返しながら継続的に利用されていた様子があきらかになった(第146次)。2007年度の調査では谷の奥部に掘立柱建物が複数建てられていたことが判明している(第151次)。こうした一連の調査から、宮殿や寺院の建ち並ぶ飛鳥の中心部に対し、周辺の丘陵裾部における土地利用の一端があきらかになってきたことは重要な成果である。

今回の調査は、第146次調査で検出した石垣の延長部を確認すること、および遺跡の東辺部の状況を解明することを主な目的として実施した。調査面積は1150㎡、調査期間は2008年12月16日～2009年8月25日。なお、本調査は2008年度からの継続調査である。

**調査地の地形と基本層序** 調査地は谷地形の中央東寄りに位置し、東に尾根裾を控え、調査区南隅が最も低い地形となっている。現地表面の標高は、北隅部で120.80m、南隅部で117.10mとなる。調査区は、第146次および第151次調査区の南辺と重複する形で北辺約40m、南辺約50m、南北25mの略台形に設定した(図127)。また、南隅部は第141次調査南西区の東端と一部重複する。

調査区北辺では、第146次調査区南壁での土層との対応から、Ⅲ期およびⅡ期整地層上面を遺構検出面とした。

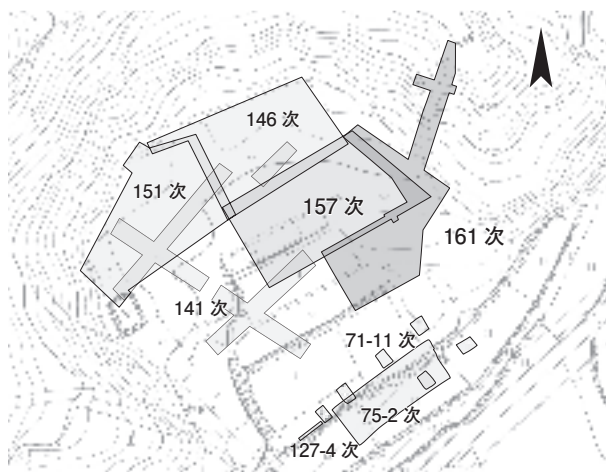


図127 調査区位置図 1:2000

東北部では、表土下に東側尾根からの斜面堆積による黄褐色土層が厚く堆積しており、118.50m前後で遺構検出面となる。西辺部では、表土下に黄褐色砂質土層があり、北端で118.20m、南端で116.60m前後で遺構検出面となる。また、調査区東南部は、段畑等の造成により整地土が削平され、耕作土掘削後すぐに基盤層に達するところもある。

調査区西半部は旧谷筋にあたっており、深さ約2mにおよぶ埋立土の層を確認した。この埋立土上で、地滑り状の大規模な自然流路の痕跡(SX183)も確認している。



図128 石垣SX100検出状況(北西から)

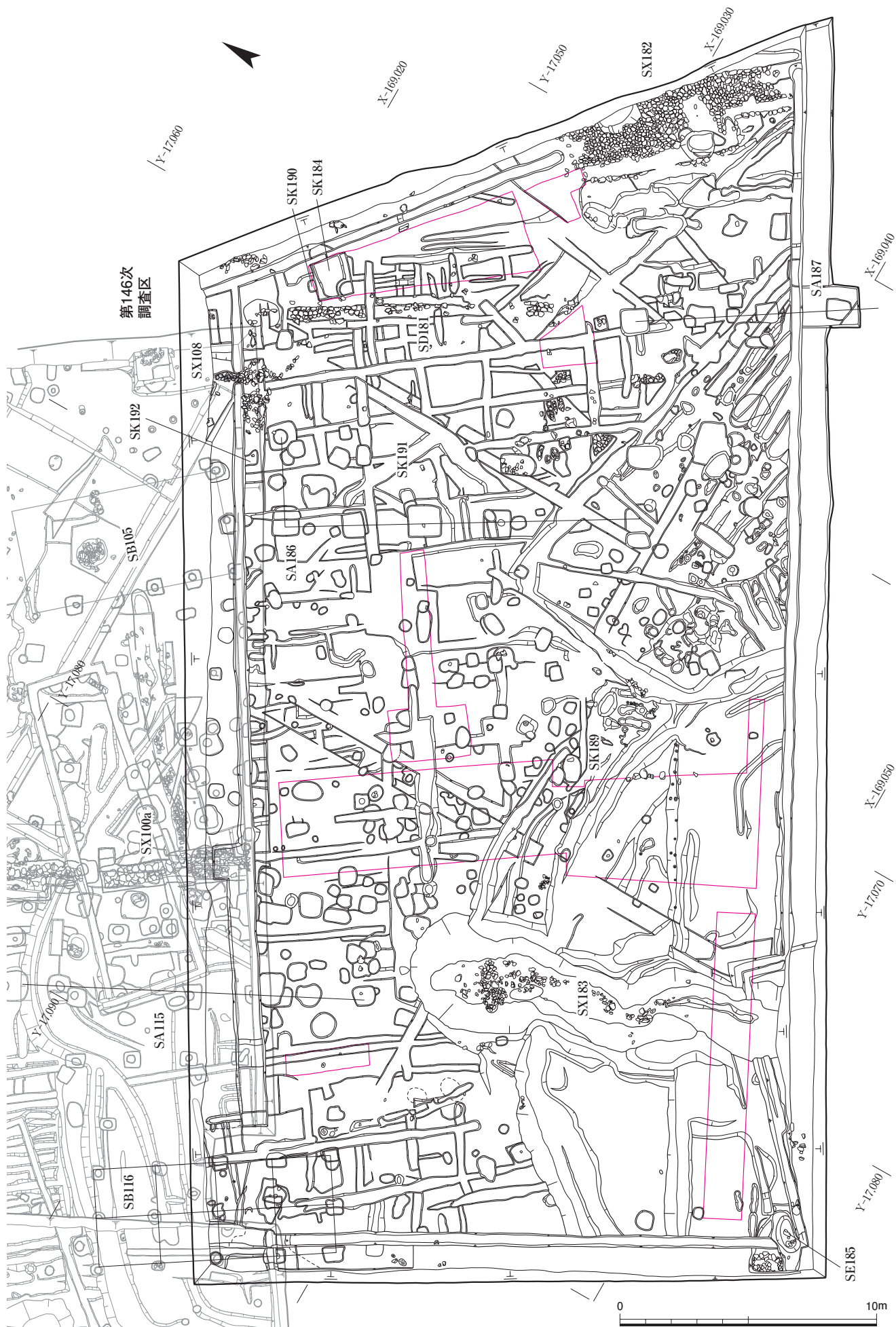


図129 第157次調査遺構図 1:200



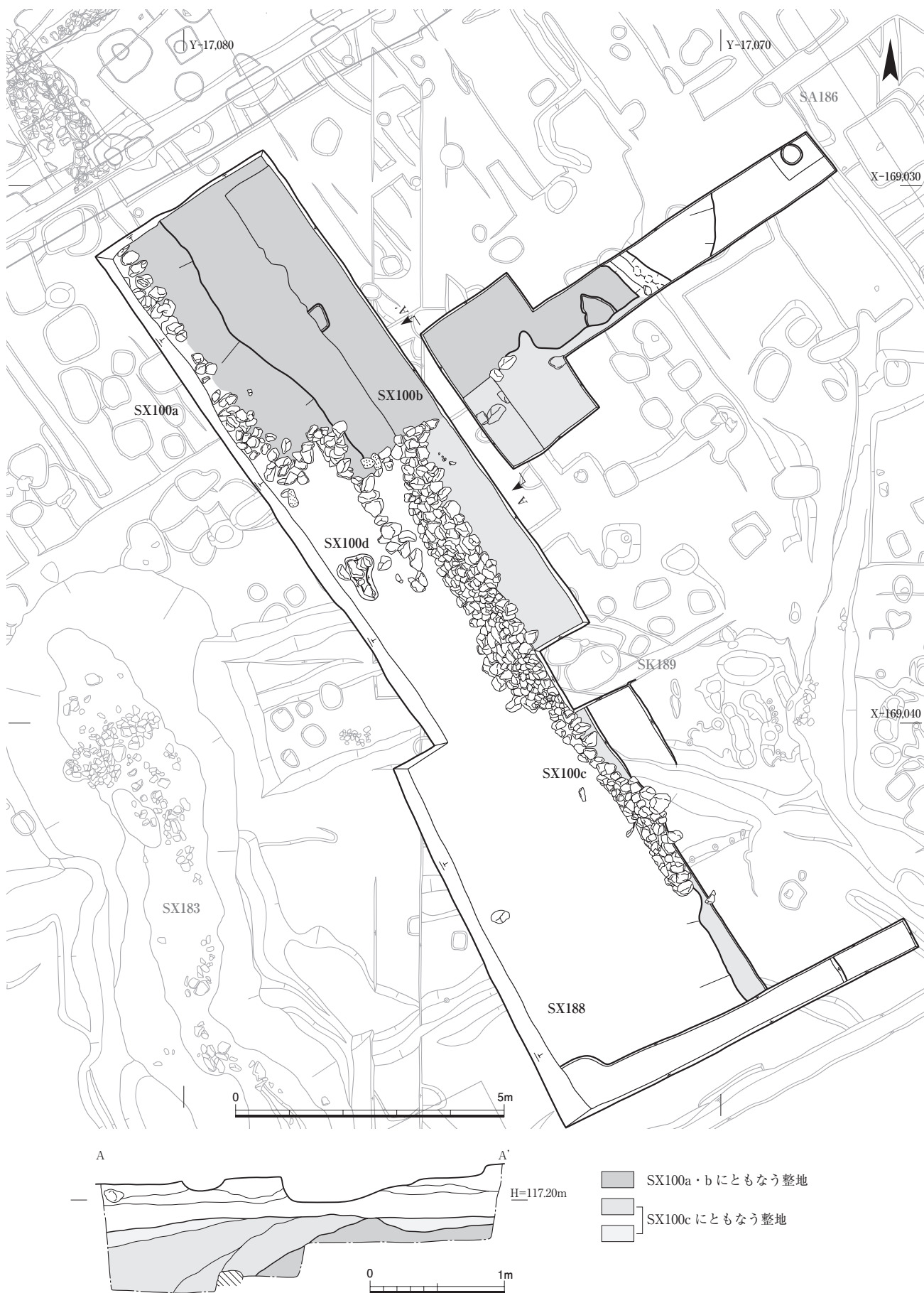


図130 石垣SX100関連遺構平面図 (1:100)・断面図 (1:40)



図131 石垣SX100a～d接続部（南西から）



図132 石垣SX100cおよびSK189（南西から）

## 検出遺構

検出した遺構は、(1) 調査区西半に本来存在した旧谷地形とそれに関連する遺構群、(2) この谷を埋め立て、整地をおこなった後の遺構群、の大きく二群に分けることができる。確認した主な遺構には、石垣、石敷、掘立柱建物、掘立柱遺構（塀）、土器廃棄土坑、石組溝、土器埋設遺構、井戸などがある。

### 旧谷地形とそれに関連する遺構群

谷SX188 第146次調査で検出した石垣SX100は、遺跡のほぼ中央にあった旧谷筋の東岸に、据え付けのための整地をおこない、裏込めを用いずに積み上げていた。この谷は、石垣北端近くから裾広がりになり、今回の調査区北壁で幅約10m、深さ1.5m以上となる。谷下部の青灰色粘土層からは、土器および獣骨が出土した。

いっぽう、調査区南壁付近では、調査区内において対岸（西岸）の立ち上がりは認められず、幅20m以上、深さ1.8m以上となることが判明した。

石垣SX100 調査区西南部の一段低くなった箇所において、耕作土を掘削除去した段階で、石垣の一部と思われる石材が出土した。このため、石材西側に断割区を設けて谷の埋立土を掘り下げ、南端3.3m分の石垣の存在を確認した。この時点で石垣の総延長等が判明したが、この範囲の石垣は前回検出した石垣と直線的に筋が揃わず、未掘部分においてゆるやかなカーブを描くか、鍵手状に屈曲するものと考えられたため、石垣の想定される範囲全体に断割区を拡張した（図130）。

その結果、北から延びる石垣（SX100a）は、一回屈折して東に折れ（SX100b）、その途中に南の石垣をあらたに継ぎ足していること（SX100c）、屈折部には谷に向かって下るステップ状の石列（SX100d）を付加していることが判明した。さらに、SX100bは、SX100cとの接続部以东へも延びている状況が認められたことから、SX100bの延長上にさらに断割区を設定し、その状況を確認した。

SX100aは、崩落が著しく、遺存状態は第146次での検出状況に比べてよくない。残存している基底に近い部分では、長さ30～40cmほどの石材を斜面に対して縦方向に使い短辺が谷に向くように積み上げている。前回の調査とあわせると北端から約22mあることが判明した。

SX100bは、SX100aの南端に「一」状に取り付く。SX100cの整地土に埋められているため、断割調査により部分的に確認した。SX100bの整地土と、積み足したSX100cの整地土の境界線の東端が、尾根から続く基盤層の肩部にいたることから、SX100bは上端で約7mあったものとみられる（図130）。

SX100cは、長さ10.5m分を検出した。正面形が船底形を呈するもので、上端を一部破壊されているが、遺存状態は良好で、もっとも高く積まれた所で高さ1m、9石を約50度の勾配で積む。裏込石を用いず石を一石ずつ積み上げることは、SX100aと同様である。径20～30cmの、SX100aに比べて一回り小ぶりの石材を用いている。基底部に特に大型の石材を用いることはないが、中央には4石の大型の石を据え、2石を間を開けて縦方向におくことで、排水施設状につくる（図132）。開口部は20×30cm。



SX100cの南端以南では斜面に石積みの痕跡等がみられず、多量の崩落石も認められないことから、現状では石垣はSX100cの南端でとぎれるものと考えられる。北端からの全長は約34mとなる。

SX100dは、SX100bの「一」形をなす角のところから、南に向かって付加された石列である(図131)。谷の中に降りるためのステップのようなかたちになる。SX100a同様30～40cmほどの大きさの石材を、12石程配列する。谷内からみると、SX100cの基底ラインよりも一段下がった位置にほぼ沿うようなラインをなしている。

以上のことから、石垣SX100は当初「L」字形で構築され、さらに南面に盛土し東西方向の石垣を埋めた後に、南に約10m延ばしたことが判明した。この時の整地は北側も含め石垣以東の広い範囲におよぶ。L字の時期を一定期間とみることもできるが、この継ぎ足しが工程差であった可能性も考慮する必要がある。なお、SX100cの整地土からは、飛鳥Ⅰの新しい段階の土器が出土し、石垣継ぎ足しの時期を知る手がかりとなる。

**石垣SX100・谷SX188の埋め立て** 石垣SX100は、7世紀中頃には前面に広がる谷SX188とともに大規模な整地によって埋め立てられる。今回の調査では、調査区北辺、石垣前面、調査区南辺においてこの谷内埋立土の断割調査をおこなった。特に後二地点における谷埋立土は、東から西への傾斜をもち、石垣側から順次埋め立てられていった様子が明瞭である。谷内下部には青灰色粘土が堆積し、石垣直上に橙褐色土、炭化物を含む間層をはさみ、基盤層に起源をもつとみられる黄褐色粘土により谷の上

部まで埋め立てがおこなわれている。なお、SX100cと重複し、埋め立て後につくられた土坑SK189からも、飛鳥Ⅰの新しい段階の土器が出土しており、埋め立て時期の下限を知ることができる(図132)。

### 谷の埋め立て後の遺構

谷の埋め立て後の整地土上では、局所的な崩落・削平・整地等が認められ、7世紀中頃から奈良時代を中心とする遺構が重複して検出された。以下では、調査区東辺から主な遺構について記述することとする。

**土器廃棄土坑SK184** 調査区の北端で検出した2×0.8m、深さ40cmほどの平面楕円形の土坑(図133)。後述するように、埋土は間層をはさみ上下に分かれるが、100点をこえる7世紀中頃の土師器・須恵器が出土した。

**石敷SX182** 調査区東南隅の尾根裾のところで、幅1.5～2m、現存長8～9mの石敷を検出した(図134)。尾根側に面を揃えて縁取りとなる石を並べ、尾根との間に溝をつくる。谷側には鍵手状に石組溝をめぐらせる。側石のみの構造で底石をもたない。内法幅約30cm。東北部は調査区外に続くものと考えられるが、西北部と東南部は壊されている。7世紀中頃～後半にかけての遺構と考えられる。



図133 土器廃棄土坑SK184(東から)



図134 石敷SX182(南東から)

石組溝SD181 調査区北端から南東方向へ、ほぼ直線に長さ12m以上にわたり延びる。側石は多くが抜き取られており、数石が残るのみである。溝底からの立ち上がりは、15cm程である。底石は河原石を3石並べたもので、幅約50cm。基底部の高さおよび整地土のあり方から、7世紀後半以降のものと考えられる。(次山 淳)

土器埋設遺構SX190 SD181の東側において、土坑SK184を埋めた整地土(赤褐色粘性砂質土上層)上で検出した。径57cm、深さ33cmの土坑の埋土上層部分(第1層)に、須恵器杯Bに蓋をかぶせ、ほぼ正位置に埋設されていた(図135～137)。第1層には多量の土器・礫が含まれており、特に杯底部周辺では密な様子が認められた。

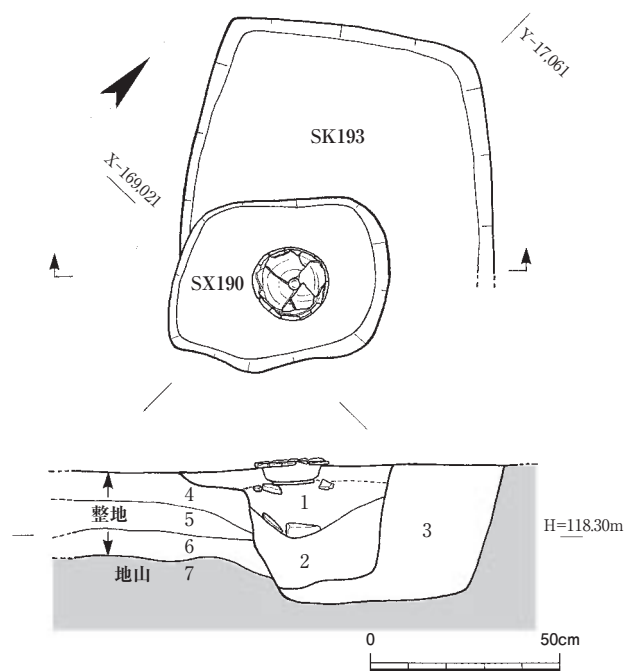
埋納されていた須恵器杯B蓋は、口径19.0cm、器高4.0cm。焼成不良で一部炭素吸着がみられ、灰白色を呈している。杯Bは、口径16.9cm、器高6.5cmである。焼成良好で灰色を呈す。底部はヘラ切りの後、高台が貼り付けられている。これらは藤原宮期頃の所産であると考えられる。杯Bの内部には粘質土が詰まっていたが、内容物等は確認できなかった。

須恵器杯Bを用いた土器埋設遺構は、平城京左京八条一坊三坪、右京八条一坊十四坪等に例がある(奈文研『平城京左京八条一坊三・六坪発掘調査報告書』1985、奈文研『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書』1989)。平城京右京八条一坊十四坪のSX1535は、東西34cm、南北21cm、深さ18cmの土坑の底付近に土器が設置されており、土器を埋納するために掘られた土坑であることが明確にわかる。内容物等から、胞衣埋納遺構と考えられている。

これに対し、本遺構は土器が埋設されていた位置が埋土の上層部分である。本遺構と重複し、より古い土坑SK193を検出しており、SK193が埋められた後、同じ場所に土器を埋納するためにSX190が掘られた可能性もあるが、SK193が柱穴掘方であり、SX190がその抜取穴になる可能性もある。後者の場合、周辺の整地からみて7世紀後半以降に使用された柱穴の廃絶段階の遺構であり、建物廃絶時の地鎮であった可能性もあろう。なお、柱抜き取り後の土器埋納は古くは弥生時代の竪穴住居跡でみられ(京都市埋蔵文化財研究所『平安京右京六条四坊二町跡・西京極遺跡』2007)、平安京では9世紀後半以降にそうした事例が増えることが知られている(久世康博「平安京の埋納遺構」『考古学論集』3、1990)。(木村理恵)



図135 土器埋設遺構SX190 (南東から)



1. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土 粘性弱く、しまり弱い。
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土 粘性やや強い。しまりあり。炭が混じる。
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土 粘性やや強い。しまり強い。土器を含む。
4. 2.5YR4/6 赤褐色粘性砂質土 粘性やや強い。しまり強い。小礫を含む。
5. 5YR4/8 赤褐色粘質土 赤褐色粘土ブロック混。
6. 10YR4/6 褐色砂質土 粘性やや強い。しまり強い。小礫を含む。
7. 10YR6/6 明黄褐色シルト 粘性弱い。しまり強い。岩盤が風化。

図136 土器埋設遺構SX190・SK193 1:20

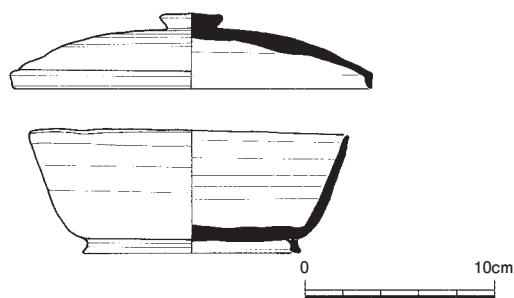


図137 SX190出土土器 1:4





図138 掘立柱遺構SA186（上：北西から）・同礎盤石検出状況（下：北東から）



図139 井戸SE185（北西から）

**掘立柱遺構SA186** 北西から南東に連なる柱穴6基5間分を確認し北端で東に1間分折れる(図138上)。柱間2.8m、北に折れる1間3.3m。全体に削平が著しいことから、さらに南へと延びていた可能性がある。一辺約1mの大型の掘方をもち、北から2・3基目には礎盤石をともなう(図138下)。礎盤石はともに30cmほどの扁平なもので、柱痕跡は径25～30cmをはかる。北から3基目の柱穴に壊される土坑SK191から、飛鳥Ⅱの土器が出土していることから、7世紀後半～奈良時代の遺構と考えられる。検出面から掘方底までの深さが30～40cmと、平面規模と比べてきわめて浅く、この範囲の整地土は著しい削平を受けたものとみられる。

**掘立柱遺構SA187** 北西から南東に連なる柱穴列を調査区内で3基、南に拡張し1基の3間分を検出した。さらに南東に延びる可能性があるが、以北へは延びないことを確認している。柱穴は長方形で100cm×80cm。深さ70～90cmといずれも深い。柱間2.7m。石組溝SD181と同時併存しないことから、7世紀前半から中頃の遺構である可能性が高い。

**土坑SK189** 石垣SX100cの中央付近にあたる位置で検出した廃棄土坑(図132)。1.1×0.7mの楕円形を呈し、深さ20cm。埋土には炭、焼土とともに大量の碎片化した土器が含まれていた。土器は飛鳥Ⅰの新しい段階である。

**掘立柱建物SB116** 第146次調査および第151次調査で検出した梁行2間の総柱建物SB116の南端を確認し、桁行が4間となることが判明した。柱間は、桁行2.3m、梁行1.8m、柱穴は隅丸長方形で一辺は50～60cmある。

**自然流路SX183** 谷を埋め立てた整地土を大きく削り取る地滑り状の痕跡を確認した。調査区内に谷頭をもつ。埋土内には、瓦器等を含むことから、中世以降の崩落と考えられる。

**井戸SE185** 調査区西南隅で、曲物を枠に用いた井戸を検出した。上部は1.5×0.8mの楕円形の土坑状を呈し、河原石および土器が投げ込まれた状態で出土した(図139)。腐朽のために粘土化していたが本来は曲物を井戸枠としていたものとみられ、直径40cmの円形の痕跡の底には礫を敷き詰めていた。土器は12世紀代の土師器皿であり、井戸の廃絶の年代を示している。

この他に、炉跡の可能性のある焼け土の面や石組遺構などを検出した。(次山)

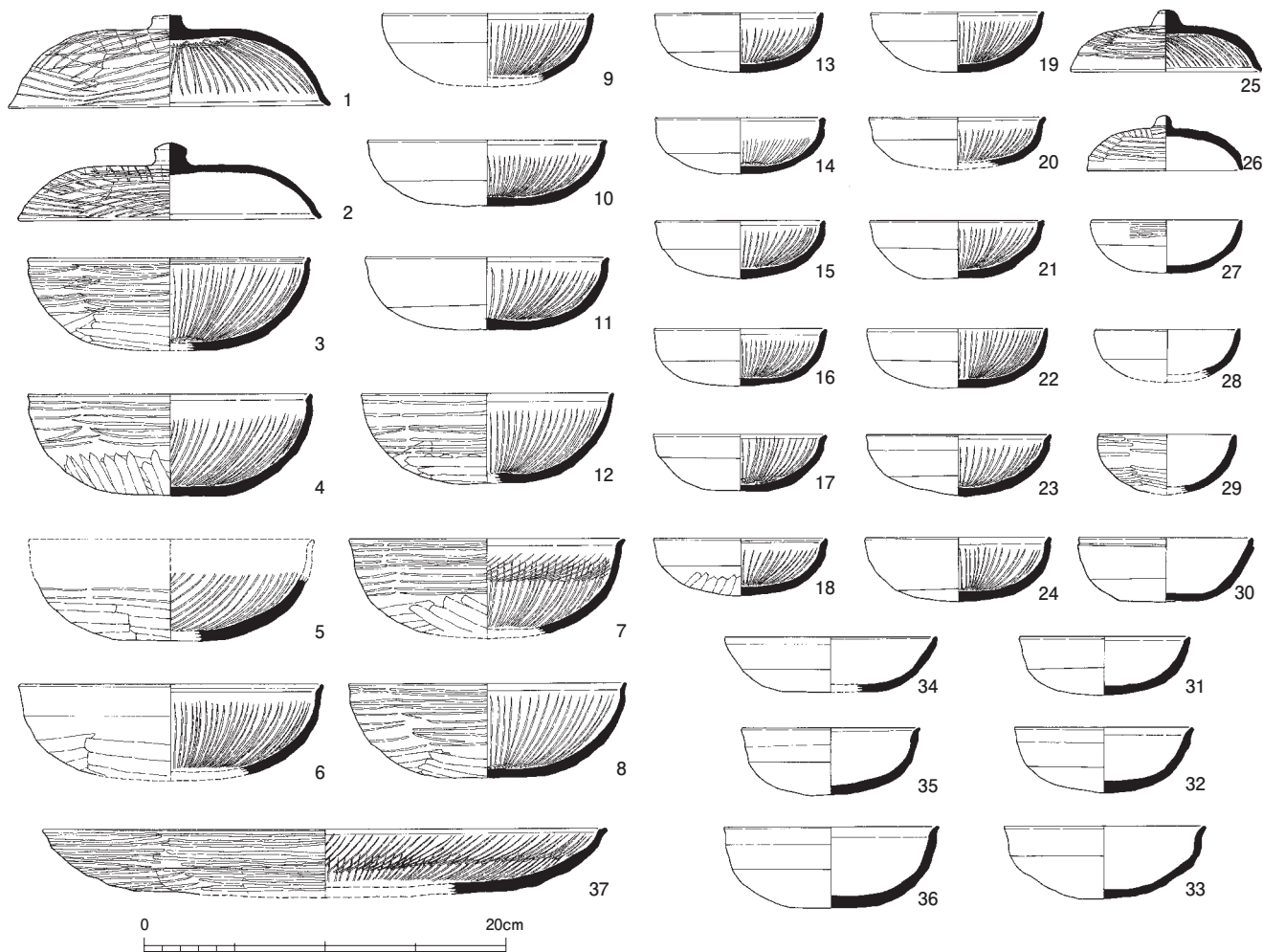


図140 SK184出土土師器(1) 1:4  
(上層: 5・7・9・11・13・14・16・20・33・34 下層: 1・4・8・12・15・17・19・21・32・35・37)

## 出土遺物

出土遺物には、土器類、瓦類、石製品、金属製品、鍛冶関係遺物などがある。

**土器類** 第157次調査区からは、整理木箱で77箱分の土器が出土した。大半は7世紀代の土師器・須恵器で、奈良時代の土師器・須恵器、中世の瓦器・土師器、近世陶磁器が少量出土した。この他に墨書土器、転用硯、施釉陶器、製塩土器、漆付着土器などがあり、土製品として、土馬が出土している。以下、SK184および石垣SX100に関連した整地土出土土器を中心に報告する。

**SK184出土土器** SK184からは、完形土器49点を含む104点の土器が出土した(図140～142)。土坑内は完掘し、土器は埋土を上・中・下層に分けて全て取り上げた。これらの土器は、土坑掘削後、底部に土器を置き(下層)、

表8 SK184出土土器の器種組成 (N=104)

土師器			個体数	比率 (%)	完形
杯 C	I		6	9.8 6.6 19.7	36.1
	II		4		
	III		12		
小形杯			3	4.9	9
杯 G	II		3	4.9 6.6	11.5
	III		4		
高杯 C	杯部残		5	8.1 23.0	31.1
	脚部のみ		14		
高杯 G	脚部のみ		1	1.6	1
蓋	I		2	3.3 3.3	6.6
	III		2		
皿 A			1	1.6	
甕			4	6.6	1
計			61	100	18
須恵器			個体数	比率 (%)	完形
杯 H	蓋	ヘラ切り	6	14.0 20.9	34.9
	身	ヘラ切り	9		
杯 G	蓋		11	25.5 27.9	53.4
	身	ロクロケズリ	7		
		ヘラ切り	5		
短脚高杯			2	4.7	1
壺蓋	G形態		1	4.7	1
	H形態		1		
椀			1	2.3	
計			43	100	31



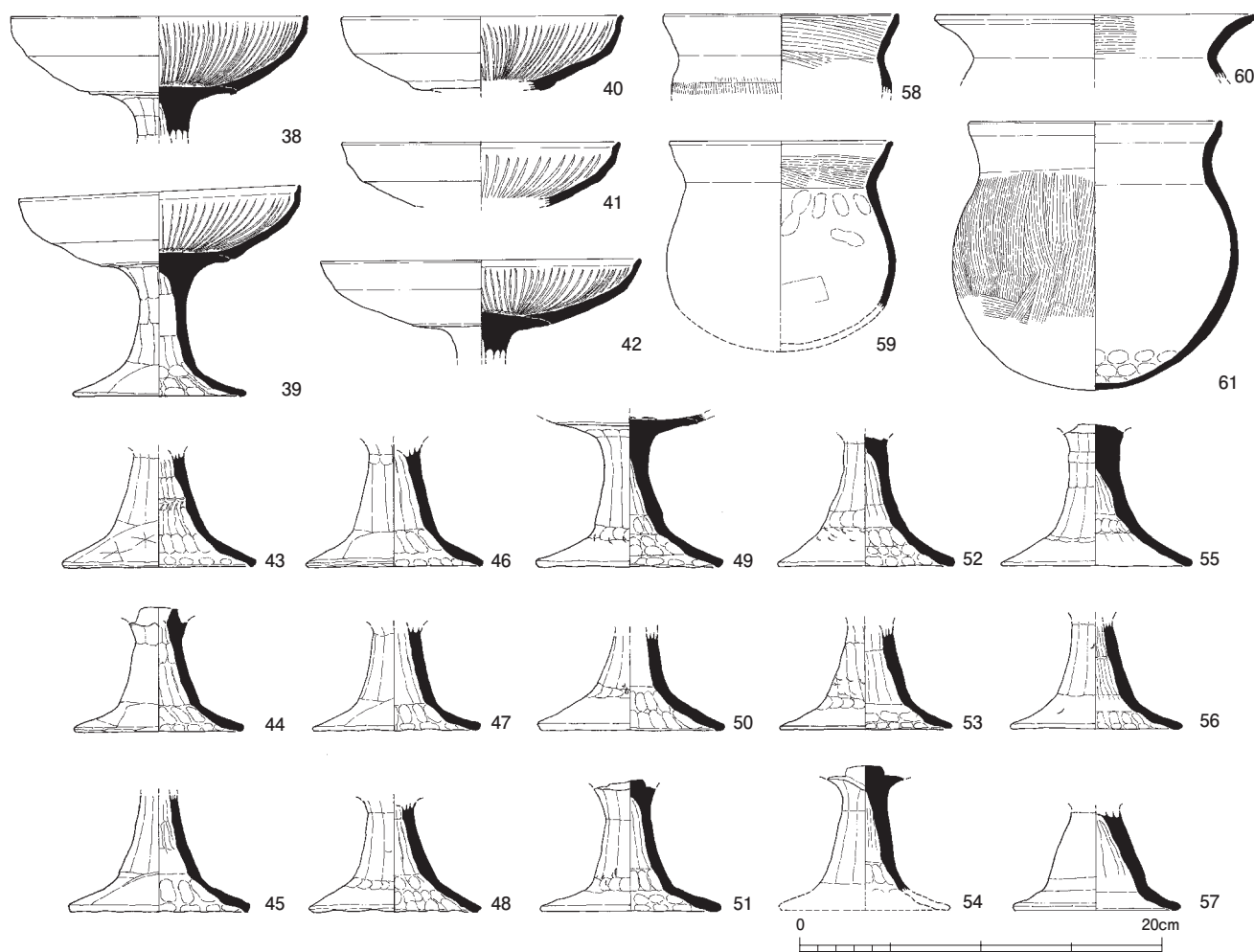


図141 SK184出土土師器(2) 1:4  
(上層: 38・40・41・45・47・49・51・52・54～56 下層: 39・42～44・46・48・50・53・57～61)

黄褐色系の土を被せた後(中層)、再び土器を置いて埋めた(上層)とみられる。各層出土の土器には型式的な差はなく、これらの土器は極めて一括性の高い資料といえる。以下では各層出土土器を一括して記述する。

SK184出土土器の器種組成をみると(表8)、土師器・須恵器ともに杯が多く、全体の7割を占め、高杯・皿・碗を含めると供膳具が9割を越えるのに対し、煮炊具・貯蔵具は、土師器甕4点、須恵器壺蓋2点のほか甕体部小片のみと極めて少量である点が特徴的である。

土師器は、杯C・杯G・蓋・高杯C・高杯G・皿A・甕がある。杯C(3～24)は口径により杯CI～CIIIに分かれる。杯CI(3～8)のうち、7のみ内面の暗文が二段放射暗文で、外面調整はb1手法(3～5・7・8)とb0手法(6)がある。径高指数は33.1～36.1である。杯CIIは器高が深いもの(9・12)と浅いもの(10・11)があ

る。杯CIII(13～24)は、口径9.1～10.1cmである。18がb0手法で、他は全てa0手法である。断面半球形の小形杯(27～29)は器面摩耗が著しいが、27・29には外面ミガキを施す。杯G(30～36)は口径から杯GII、杯GIIIの2つがある。形態は器高が浅いもの(34)と深いものに分かれ、深いものは口縁部形態から、外側に段を持つもの(30)、内側に面を持つもの(31)、外反するもの(33)、口縁端部を外方につまみ出すもの(32・35・36)に分かれる。蓋(1・2・25・26)は口径に大小2つがある。皿A(37)は1点のみ出土した。底部から口縁部まで丸みを持って立ち上がり、口縁端部に平坦面を持つ。高杯C(38～56)は杯部と脚部が接合するものは少ない。杯部は、碗形で深いものが主体で、42のみ浅い皿形である。脚部は、裾部外面を分割ナデで最終調整するもの(39・43～47)と、裾部外面の屈曲部付近に指頭圧痕や爪痕を残すもの(48

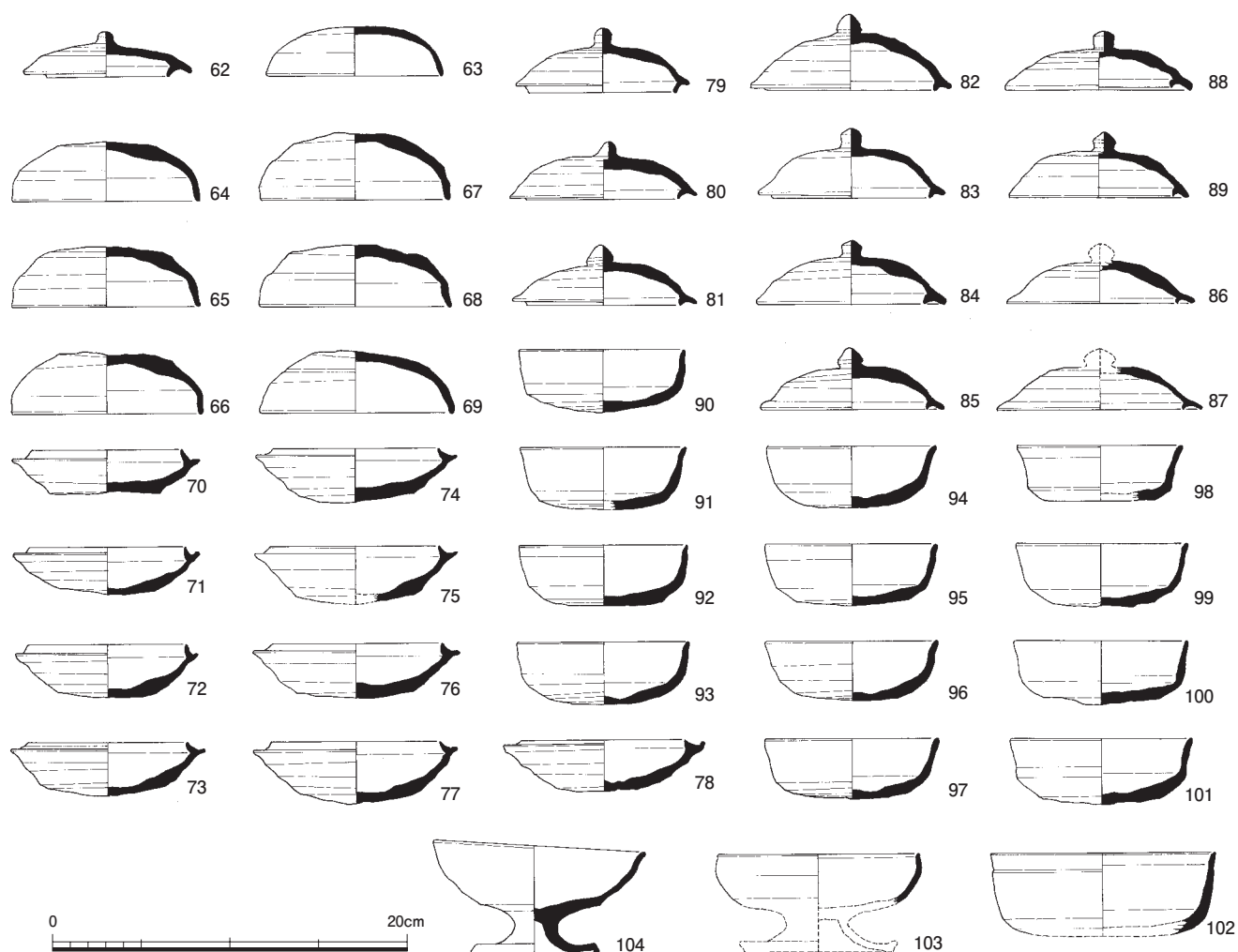


図142 SK184出土須恵器 1:4

(上層: 63・66・69・70・75・84・87・90・91・98・99・101～103 下層: 62・64・65・67・68・71～74・76～83・85・86・88・89・92～97・100・104)

～53)、脚柱部を縦方向にナデ調整したままのもの(55・56)がある。43は外面に「\*」状の針書きが焼成後に施される。57は高杯Gの脚部である。甕(58～61)は、口径12～17cmと小・中形である。61は、外面ハケ、内面ナデを施す大和型である。

須恵器は、杯H・杯G・短脚高杯・壺蓋・碗がある。杯H(64～78)はいずれもヘラ切り不調整である。口径は蓋が10.4～10.7cm、身は蓋のあたる部分で10.1～10.7cmの間にまとまるが、70・71は9.6cmとやや小さい。杯G蓋(79～89)は、頂部から口縁部にかけて丸みを持つ形態が主体である。かえりが口縁部より下に出るもの(79～83)、同じ高さのもの(84～87)、内側に入るもの(88・89)がある。杯G(90～101)は、口径9.4～9.6cm、器高3.3～3.6cmと法量がまとまる。底部の形態は、丸みを持つものが主体で、調整はロクロケズリ(90～93・95～97)とヘラ切り不

調整(94・98～101)がある。93は外面に2条の朱線がある。壺蓋には杯H形態(63)と杯G形態(62)がある。102は碗と思われる。103・104は短脚高杯。104は軟質の焼成で灰白色を呈する。なお、62・71・72・87は灰白色の胎土で灰緑色の灰を被り、形態などから東海系の製品の可能性が高く、特に62・72・87は美濃須衛窯産の可能性が高い(京都国立博物館 尾野善裕氏の御教示による)。

青灰色粘土層・石垣SX100関連整地土出土土器 土器は、石垣SX100機能時から谷SX188埋め立て直前までの堆積土である青灰色粘土層(105～137)、SX100cの整地土中(138・139)、石垣直上の橙褐色土層(140～145)、谷SX188埋立土である石垣西側の整地土と黄褐色粘土層(146～154)から出土した(図143)。

青灰色粘土層からは、多量の土器が出土した。供膳具を中心に報告する。土師器杯C I(107・108)は深い半



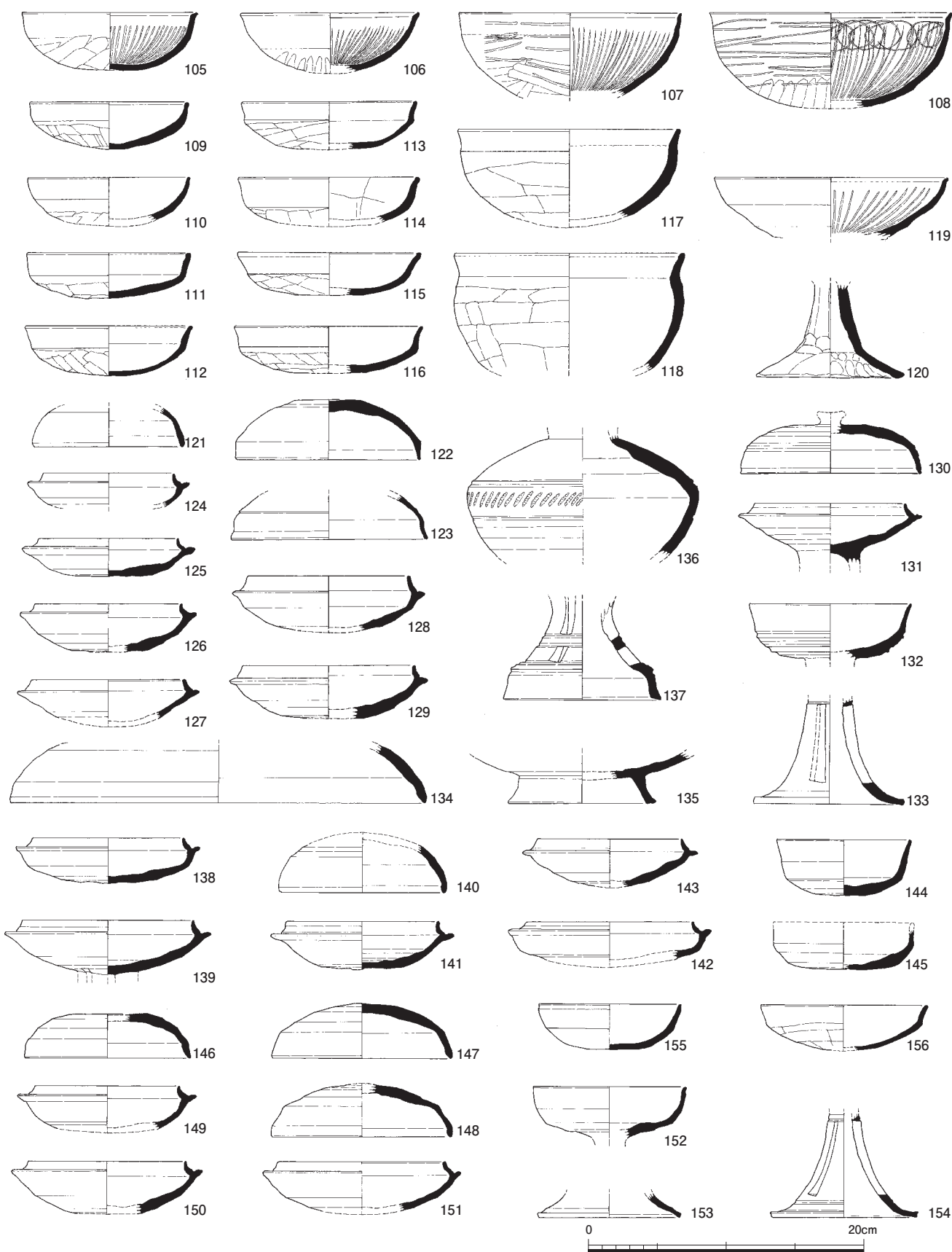


圖143 青灰色粘土層・石垣SX100関連整地土出土土器 1:4

球形を呈する。杯CⅡ(105・106)はb0手法で調整する。杯H(109～116)は大量に出土した。口縁部形態や胎土が多様だが、口縁部のヨコナデと底部との間を削り残すものが多い。111・114は内面に「+」の針書きがある。鉢H(117・118)も杯Hと同様の胎土・製作技法である。須恵器杯H(121～129)は口径から13～14cmのもの(122・123・128・129)と11～12cmのもの(121・124～127)に分かれる。全てロクロケズリを施す。135は台付椀。134は小破片だが大型蓋に復元した。長脚高杯は有蓋形態(130・131)と無蓋形態(132)がある。脚部(133)は三方二段透かしである。台付長頸壺(136・137)は接合しないが同一個体と見られる。

SX100c整地土出土の須恵器杯H(138)は、口径12.2cmで底部へう切り不調整。有蓋高杯(139)は口径13.6cmで三方に透かしが開く。橙褐色土層出土の杯H(140～143)は、口径が大小2つに分かれる。杯Gは2点(144・145)出土し、144は体部が直線的で深い形態である。なお、石垣関連整地土層から出土した須恵器杯Gはこの2点のみである。橙褐色土層出土土器の中で、143～145は石垣に貼り付いた状態で出土した。

石垣西側の整地土および黄褐色粘土層から出土した土器は全体に破片が多い。須恵器杯H(146～151)は口径や杯身の立ち上がりの高さが大小様々である。148は内面に赤色顔料が付着する。高杯(152～154)には長脚・短脚があり、このうち153は東海系の製品の可能性が高い。土師器は杯Cが少量で、杯G(155)と杯H(156)が主だが、杯Hの量が多い。

その他遺構出土の土器(図144) SA186が重複する土坑SK191からは飛鳥Ⅱの須恵器杯H(157)、土師器杯CⅡ(158)が出土した。調査区北部で検出した小型の土坑SK192からは奈良時代後半の須恵器壺M(159)が出土した。SE185からは、12世紀前半代の土師器皿(160～162)が出土した。160には焼成後の穿孔がある。この他、SK189からは須恵器・土師器がやや多く出土している。飛鳥Ⅰの新しい段階でSK184出土土器よりも古い様相をもつ。

各土器群の位置付け SK184出土土器は、出土状況から一括廃棄された可能性が高く、飛鳥地域における土器様相の基準となる良好な資料である。

当該期の土器は、川原寺SD02→山田寺下層SD619お

よび整地層→飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層→坂田寺SG100の変遷が考えられている(『藤原概報22』)。

SK184出土の土器群は、①土師器杯CⅠが断面半球形の山田寺下層例よりは浅く、坂田寺SG100例よりもやや深い形態である、②杯CⅠに二段放射暗文を施すものは7のみで、一段放射暗文を施すものが主体である、③高杯Cの杯部が深い椀形のものが主体である、④皿Aを少量含む、⑤須恵器杯H・杯Gともに口径が山田寺下層例より小さく、坂田寺SG100例よりも大きい、⑥杯Hの底部調整は全てへう切り不調整で、杯Gではへう切りよりロクロケズリがやや多い、⑦杯G蓋のかえりが口縁部より下に出るもの、同じ高さのものが主体である、などの点から、飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層出土の土器群と同時期に位置づけることができる。また、山田寺下層出土土器よりもやや新しく、飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層出土土器よりも古く位置づけられる本遺跡焼土層SX037出土土器(第75-2次調査『藤原概報25』)よりは新しい内容をもつ。

青灰色粘土層出土土器は、飛鳥Ⅰの新しい段階の須恵器杯H(121・124～127)を含むが、古相を示すものが多く含まれている。特に土師器杯C(107・108)などは、径高指数が40に近く半球形を呈する。この土器や長脚二段三方透かし高杯・台付長頸壺の存在、須恵器杯Gがみられないことは、石垣の造成時期が飛鳥Ⅰの古い段階に遡る可能性を示唆する。

現時点では、これら古相の土器群の時期を示す資料は少ないが、飛鳥寺下層や山田道第3次調査黒褐色土層の須恵器(西口壽生「飛鳥地域再開発の土器」『年報1999-Ⅱ』)よりやや新しい。また、難波宮跡NW08-3次第8-6層出土土器(大阪市文化財協会『難波宮址の研究 第十六』2010)と近い内容をもつ。これらの土器群の細かい年代

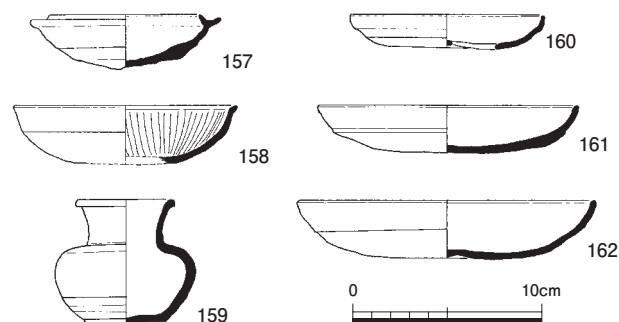


図144 各遺構出土土器 1:4



的位置づけはより良好な資料の出土を待って、再度検討を加えたい。

石垣関連整地土の土器は複数型式を含むが、石垣西側整地土・黄褐色粘土層に含まれる最新型式(146・149)は飛鳥Ⅰの新しい段階の土器であり、石垣の埋め立て時期を示す。

**土器組成の変化と遺構との関係** SK184出土土器および青灰色粘土層出土土器は、焼土層SX037出土土器と比較すると、須恵器杯Gの有無、杯H・杯Gの口径と底部調整手法、土師器杯Cの形態からみて、青灰色粘土層→SX037→SK184という変遷が考えられる。

この3つの土器群を比較すると、青灰色粘土層出土土器は、時間的に幅をもつ土器群であるものの、土師器の中で、杯Hが主体を占める点が特徴である。次に、SX037出土土器は土師器杯Cの暗文や外面調整に幅広の工具を用いる点、土師器杯Hがごくわずかで、口縁端部外面に面や段をもつ杯Gが主体である点、須恵器杯Gが直線的で器高が深く金属器に近い形態(gタイプ)である点が特徴である。

また、SK184出土土器は土師器杯Cが橙褐色～赤褐色系の胎土で細い暗文を施す点、土師器杯Hを含まず、口縁端部を内傾または外方へつまみ出す杯Gが主体である点、須恵器杯Gが杯Hを逆転したような丸みを持つ形態(hタイプ)である点が特徴である。

つまり、各土器群は、土師器杯Hと杯Gの構成比、土師器杯C・須恵器杯Gの細部の特徴が大きく異なる。これらは、石垣機能段階→SX037焼土層形成段階→谷埋め立て後の段階(SK184)という遺跡の性格の変化と連動した土器組成の変化を示す。遺跡の性格と共に土器の供給体制も変化した事が推測される。(小田裕樹)

**瓦類(図145)** 調査区からは、軒丸瓦2点、軒平瓦1点、面戸瓦1点、丸瓦233点(19.1kg)、平瓦696点(58.6kg)が出土した。いずれも小片が多く、包含層からの出土がほとんどである。

1は、角端点珠の素弁九弁蓮華文軒平瓦。外縁をもたない型式で、飛鳥寺Ⅶ型式と同範。瓦当下半部の破片なので、丸瓦接合技法などは不明だが、瓦当裏面は円を描くようになで、側面部も周縁に沿ってなでているのがわかる。焼成は良好で、精良な胎土に若干の長石・石英・黒色粒を含む。色調は灰白色。石垣SX100を埋め立てた

土から出土した。2は、瓦当部の摩滅が著しいが、おそらく川原寺所用軒丸瓦721型式であろう。721型式は平安時代の細弁十六弁軒丸瓦である。焼成は軟質で、大量の長石・石英・クサリ礫を含む。色調は赤褐色。3も川原寺所用の四重弧文軒平瓦である。太くやや丸みのある弧線と瓦当と凸面が作る角度から651型式B1種と考えられる(花谷浩「川原寺出土重弧紋軒平瓦細見」『紀要1999-I』)。焼成は堅緻で、精良な胎土に長石・石英・黒色粒を少し含む。色調は外面が青灰色で、断面は赤灰色。

このように2と3は川原寺所用瓦である。甘樫丘東麓遺跡では、これまでも包含層資料ながら、創建期から平安時代にかけての川原寺所用瓦が一定量出土している。甘樫丘東麓遺跡は川原寺金堂から北西に約500m離れており、寺域からはずれる。それにもかかわらず、川原寺所用瓦が出土する経緯について考えてみたい。

川原寺(弘福寺)は、古代から平安時代にかけて各地に広大な寺領をもっていた。寺領は川原寺寺域周辺の大和国路東三十条三里内にもあったことが知られており、『川原寺発掘調査報告』(奈文研1960)でも、その範囲の検討がなされている。

寛弘2年(1005)の「大和国弘福寺牒」には、路東三十条三里にある弘福寺の寺辺地として、「十一坪七段二百八十歩」とあり(「天理図書館蔵文書」『平安遺文』444号)、また永久4年(1116)には弘福寺の寺領田畠のひとつとして、「十四坪二反字寺岳并山地」という記載がある(「東寺百合文書せ」『平安遺文』1862号)。これらを『大和国条里復原図』に照合すると、ちょうど甘樫丘東

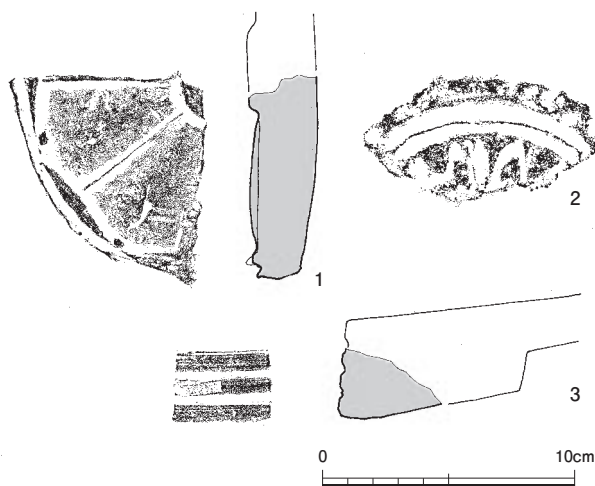


図145 第157次調査出土軒瓦 1:3

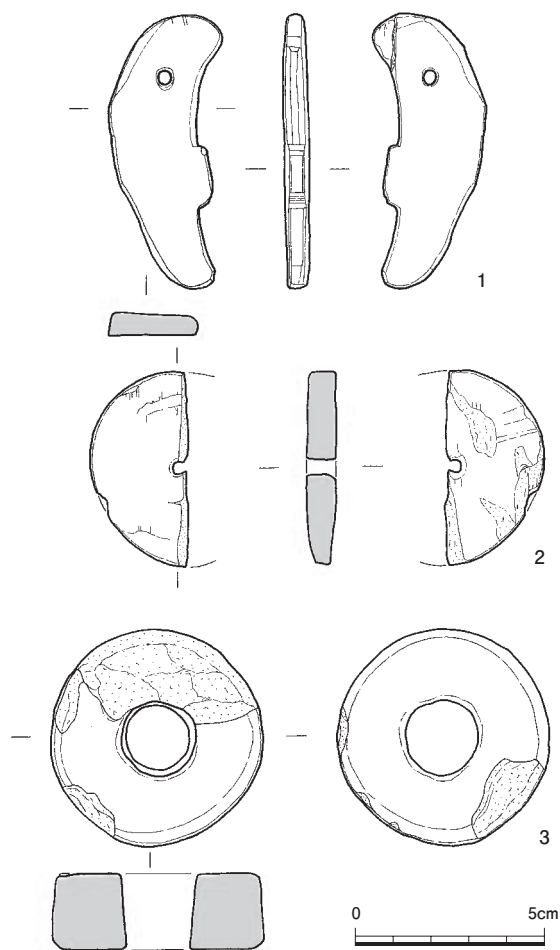


図146 第157次調査出土石製品 1:2

麓遺跡一帯にあたる（樫原考古学研究所『大和国条里復原図』1980）。特に「寺岳并山地」は、甘檜丘の一角のことを指す可能性がある。このことが、甘檜丘東麓遺跡において川原寺所用瓦が出土する要因であろう。おそらく、寺で不要になった瓦片を弘福寺領である甘檜丘に廃棄したのではないかと考えられる。（石田由紀子）

**金属製品・石製品** 刀子・釘などの金属製品や鉄滓・炉壁・韃羽口・焼土・砥石などの冶金関連遺物が、それぞれ小コンテナ1箱分出土した。

石製品は、子持勾玉1点、紡錘車2点、碁石1点、サヌカイト製の鎌1点が出土した（図146）。1は、耕作土から出土した滑石製子持勾玉で、長さ7.25cm、幅3.02cm、厚さ0.65cmである。背部の摩耗が激しく突起が不明瞭であるが、大平分類のB型2類に相当する（大平茂「子持勾玉年代考」『古文化談叢』21、九州古文化研究会、1989）。断面比率が0.30、反りの比率が0.42で、大平の年代観では7

世紀後葉に比定できる。2は耕作溝から出土した滑石製紡錘車で、径5.15cm、厚さ0.8cmを測る。3は、調査区北部の小穴から出土した滑石製紡錘車で、径5.6cm、厚さ2.0cmである。（木村）

**動物・植物遺存体** 獣骨やモモの核が少量出土している。骨片は石垣西側整地土下の青灰色粘土層から出土し、ウマの下顎骨や中節骨、ウシの中足骨が含まれる。この中にはビビアナイト（藍鉄鉱）が析出して、亀裂が生じたり、表面観察が困難な資料も認められた。（山崎 健）

### 調査のまとめ

1. 石垣SX100は、さらに南方に構築されている可能性も残すが、現状での全長が前回の調査とあわせて約34mにわたるものであることが判明した。特に、北から一連のものではなく、途中で屈折し（SX100b）、さらに南に継ぎ足す（SX100c）とともに、側面にステップ状の石列を付加する（SX100d）。SX100cは、①正面形が船底形になる、②全体に小型の石材を用いており基底部に大型の石を据え並べ根石とすることがない、③最深部に排水施設状の石組を設ける、など複数の特徴を指摘することができる。こうした特徴は、この石垣の系譜・構造的な意味等についての位置づけをおこなう上で重要な材料となると考えられる。

2. これまでの甘檜丘東麓遺跡の調査の中で、もっとも遺存状態がよく構造のわかる石敷遺構SX182を確認した。石敷は東側の尾根に沿っており、調査区の東側、および南東の尾根に沿った遺構の展開が予想される。

3. 今回の調査では、石垣SX100に関連して、その構築、使用、埋め立ての各時期にともなう土器が出土した。また、SK184からは完形品を中心に100点をこえる土師器・須恵器が出土し、7世紀中頃の良好な一括資料を得ることができた。これらはいずれも連続しかつ近接する時期の所産であることが知られ、石垣SX100と谷SX188の埋め立て後、大きな中断期間をおくことなくこの遺跡が利用されたこともあきらかとなった。

4. 調査区南半部は、段畑の造成等による削平を受け、遺構面の遺存状況はきわめて悪い。いっぽう、北半部、特に尾根に近い北端部分では整地土および遺構が重層的に遺存しており、7世紀から8世紀にかけての度重なる土地利用の状況を確認した。（次山）



## 2 第161次調査

**調査の概要** 第161次調査の目的は、第157次調査で検出した石敷SX182の全容およびその背後の斜面の利用状況の解明、谷の入口部の遺構の様相の解明、丘陵上部の遺構の有無の確認、以上の3点である。調査地は、第157次調査区の南東に隣接した谷部、第157次調査区の北東に隣接した尾根裾部、および尾根の斜面に延ばしたトレンチの、3つの調査区からなる。調査面積は846㎡。調査は2009年12月14日より開始し、2010年3月下旬現在も継続中である。詳細は次年度の紀要において報告することとし、ここでは概要を報告したい。

**調査の成果** 検出した遺構は、建物・柱列・石敷・溝・石組溝・焼土遺構など。出土遺物は大半が7世紀代を中心とする土器で、その他に少量の瓦・鉾滓などがある。

今回の調査で特筆すべき点として、丘陵斜面中腹の緩斜面で柱列を検出したことが挙げられる。柱列の周辺は元の地形を活かして平坦地を造りだした可能性がある。

柱列は区画施設と考えられ、丘陵上部に何らかの施設が存在することを示唆するものといえる。甘樫丘丘陵上部にも遺構が展開する可能性が高まってきた。また、柱列は柱穴の間に断続的に掘られた溝と、溝底からさらに掘削された小穴をともなっており、上部構造は今後の検討課題である。

尾根裾部では、石敷SX182、溝、石組溝、および段状の造成を確認した。SX182は下層の整地土から飛鳥Ⅰの新しい時期の土器が、上層にあたると考えられる整地土からは飛鳥Ⅱ・Ⅲの土器が出土しており、遺構が7世紀中頃に造られ7世紀後半に廃絶したことが判明した。また、SX182の下層にも溝があることを確認している。

SX182南方では、建物・柱列など掘立柱の遺構および堅穴建物を検出しており、遺構の重複関係より7世紀以降に4時期程度の遺構変遷があったと考えられる。谷部では、7世紀前半以降に谷を埋め平坦面を造成している状況があらかになった。さらに、谷埋め立て以前の様相を解明するため、下層の調査を進めている。(番 光)



図147 第161次調査区全景（南から）